

『劔南詩稿』に於ける詩人像

——「狂」の詩人 陸放翁——

西岡 淳
京都大學

序

一人の詩人に或る特定の形容を冠するということは、その詩人の作風を際立たせる便利さを持つと同時に、作品群全體の持つ多様な可能性を閑却するという危険をも孕んでいる。「愛國詩人」の名稱で呼ばれる南宋のひとつ、陸游の場合がその好例であろう。天下の半壁のみを保つ王朝のもと、中原を淪落させた異民族への主戦論を唱えて自ら前線へと赴き、策破れた後も、失意のうちにありながら死ぬまで國土回復を願い續けた彼の生き方は確かに「愛國詩人」の名を冠するに値するかもしれない、然し彼の詩別集『劔南詩稿』⁽¹⁾が、全てかかる愛國色に染めあげられているわけ

『劔南詩稿』における詩人像(西岡)

ではないことは周知の事實である。『詩稿』を繙いたことのある者なら誰しも、その詩材の豊富さと多様さ、及び詩世界の豊饒さを感じるに違いない。そしてそれが多作さと相俟って、作品群全體が巨大な宇宙として存在しているわけである。だが、その事實を事實として無批判に受容する態度から生産されるものは無い。詩とは詩人にとって單なる消閑の具では有り得ないし、内容が多様且つ豊饒であれば、詩という同一のスタイルにそれら互いに異質なものを詠い込んだ一人の詩人の精神内部には、數多の葛藤と融和とが繰り返されたことが想像される。その經緯を理解せず、結果として遺された作品のみを云々するばかりでは、眞の詩人像は結實しないだろう。その意味で「多様性」という表現も、便利ではありこそすれ何も我々には語ってくれぬ。

放翁の場合、所謂愛國詩と呼ばれる諸篇が同時代のなかに異彩を放っているだけに、その酒精分の強い作品群と、農村に於ける農民及び自分自身の生活を描く穩やかで平淡な、そして數量としては壓倒的な作品群との落差が當然問

題になつてくる。その落差を埋めることが、『詩稿』の樞要を現前させることに繋がると思はれる。

以上が私にとつての問題の所在だが、本論に入る前に先ず、前提となるべきこと、方法の大略等につき、二三、言を費やしたい。

第一に、放翁は詩人としての自分自身を客觀的に眺める透徹した眼を持っていた。『入蜀記』の旅の後、夔州通判を経て、乾道八年、四川宣撫使王炎に招かれた放翁だが、前線基地の興元（南鄭）に在ること僅か半年餘りで主戦派の王炎は中央に召還せられ、長安侵攻を唱えた放翁も其の後失意のうちに劍門關を成都へと下る。「劍門道中 微雨に遇う」はその時の作である。

衣上征塵雜酒痕 衣上の征塵 酒痕を雜う
遠遊無處不消魂 遠遊 處として消魂ならざるは無し

此身合是詩人未 此の身 合に是れ 詩人なるべき

細雨騎驢入劍門 細雨 驢に騎り 劍門に入る

（劍門道中遇微雨 卷三）
愛國者（放翁）の頻用する表現では「壯士」たらんと欲した放翁にとつて、詩人として生きること餘儀無くされた自分の姿は決して愉快なものでは有り得なかつた。小川環樹氏の言を引こう。

かれは終生反撥しつづけたにも拘らず、やがて引退したのちの田園での生活は、ますますかれを詩人にしたのは、運命の皮肉である。その運命がしつかりとかれをとらえた事を、劍門の山路において、かれははつきり感じ、自覺した、と私は解する。⁽²⁾
この指摘を裏付けるかのように、晩年に至っても放翁はこの苦い思い出を回想している。

書生本欲輩辛滑 書生 本と 辛・滑に輩ばんと欲せしに

蹭蹬乃去爲詩人 蹭蹬 乃ち去りて詩人と爲る⁽³⁾
とうたつたのは、八十四歳の時であつた。かかる自意識を持つ詩人にとつての詩は當然、單に景物の形象や感興の開陳に終始するに留まらず、運命と對峙する自分自身の在り

方をも重要な表現の對象とする筈である。『詩稿』を論ずる際、そこに描かれた放翁像を論ずるを缺くべからざる所以である。

更に焦點を定めよう。次に掲げるのは、放翁よりも一歳の年長で、略ぼ同時代を生きたと云っていい楊誠齋が放翁に和した詩である。

君詩如精金 君が詩は精金の如く

入手知價重 入手し 價の重きを知る

鑄作鼎及甗 鑄して鼎と甗おこなえとを作り

所向一一中 向う所 一一中る

我如驚竝驥 我れ 驚の驥に竝ぶが如く

夷塗不應共 夷塗をも 應に共にすべからず

(中略)

破琴聊再行 破琴 聊か再び行い

新笛正三弄 新笛 正に三たび弄せん

因君發狂言 君の狂言を發するに因り

湖山春已動 湖山 春 已に動く

(和陸務觀見賀歸館之韻)⁽⁴⁾

『劍南詩稿』における詩人像(西岡)

詩題に云う「見賀歸館之韻」とは、「楊廷秀秘監の再び館に入るを喜ぶ」⁽⁵⁾(卷二十一)である。淳熙十六年、放翁六十五歳の作だが、その頃までに放翁は嚴州に在って自ら詩集を刊行し(『劍南詩稿』二十卷、所謂嚴州刊本である。淳熙十四年)詩人としての名聲はもはや定着していた。誠齋はその放翁の詩に對し、精金の如き價の重さから説き起こして、「君の狂言を發するに因り 湖山 春 已に動く」と締めくくる。誠齋が言うように、放翁の詩には實際「狂」という語が屢々現われる。⁽⁶⁾詩人として生きざるを得ない自分を自覺していた彼は、一方で自分自身の姿を形容するのに頻繁にこの語を用いているのである。私はこの「狂」こそ、詩人陸放翁の本質を探る手掛りとなるのではないかと思う。『詩稿』に於ける自己表現としての「狂」を中心に論を組み立て、放翁の自畫像、ひいては詩人像を明らかにしていくというのが私の試みである。詳細は後述するが、前掲の詩で誠齋が、普通贊辭に用いるわけでもないこの話を特に結びに用いているというのは、當時の(一流の詩人による、という意味では)放翁評の典型であろうし、ま

た誠齋は詩人としての好意の眼で放翁の詩の本質を見抜いていたのではないかという氣がする。

一

詩文の世界で用いられる「狂」という語は、必ずしも精神の異常を意味するわけではない。従つてその語の定義は甚だ厄介だが、取り敢えずは大雑把に、常識的な社會規範から逸脱した異常さを指すものとしておく。何が正常で何が異常かは、これまた簡単に定義は出来ないが、少くとも「狂」という表現の有るところ、表現者に或る種の異常性の存在が意識されていることは基本的に容認されてよいだろう。更に『論語』子路篇に於ける孔子の言の如く、それは時に目的に對する常軌を逸した希求の念を伴うものであることに留意すべきである。

さて、そこで問題になるのは、詩人が一體何を「狂」と表現しているかということである。自己と社會との關係に於いて用いられた印象的な例として、時代は遡るが先ず、『宋書』卷八十九、袁粲傳に引く「狂泉」の説話が有る。

昔一國有り、國中の一水、號して狂泉と曰う。國人此の水を飲み、狂せざるは無し。唯だ國君のみ井を穿ちて汲み、獨り恙無きを得たり。國人既に並び狂し、反つて國主の狂せざるを謂いて狂と爲す。是に於て聚り謀り、共に國主を執え、其の狂疾を療さんとし、火艾針藥、畢く具えざるは莫し。國主其の苦に任えず、是に於て泉所に到り、水を酌みて之れを飲む、飲み畢わりて便ち狂す。君臣大小、其の狂せること一の若し、衆乃ち歡然たり。我れ既に狂せざるも、以て獨り立つこと難し。比ろ亦た試みに此の水を飲まんと欲す。⁽⁸⁾

この話は、袁粲が嵇康の『高士傳』に倣い、自らを況した『妙徳先生傳』なる著作の一部であったという。『隋書』經籍志には確かに嵇康の『聖賢高士傳』なる書物が見えるが、その書自體は夙に佚し、現在では輯本の形でしか見られない。袁粲が據り所としたのが如何なる話であったのか、現存する材料からでは遽かには知り難いように思われる。

斯波六郎氏はその著書『中國文學における孤獨感』のなかでこの「狂泉」を取りあげ、先秦諸子や『詩經』・『楚辭』

(屈原・宋玉)に源を發する孤獨感表出の歴史の一端としてこれを論じておられる。斯波氏によれば、先秦に始まり鮑照・袁粲らに至るまでの詩文に於ける孤獨感は、略ぼ「自分の周圍、或いは時世に對する不満・抵抗からおこった孤獨感」であると言つてよく、個人の表現者としてその嚆矢たる存在と目されるのが屈原であり、また彼の生(死)を描いた作品である。例えば「漁父辭」に於ける彼の、

舉世皆濁我獨清 世を擧げて濁れるに 我れ獨り清^す

めり

衆人皆醉我獨醒 衆人皆醉うに 我れ獨り醒めたり

是以見放 是を以て放たれたり

という述懐は、「自分の守る正義が周圍から拒否された」ことに起因する孤獨の苦悶であり、その感情の主觀的でストリートな吐露である。袁粲の「狂泉」は孤獨を抱く自分自身を客觀的にとらえ、それを些かユーモラスな筆致で描いている。が、いずれにせよこの兩者に共通するのは、「自分こそが正義である」という信念だと言つてよからう。自己の信念に殉じた屈原は言うに及ばず、袁粲の場合も「狂」

『劍南詩稿』における詩人像(西岡)

とは狂泉の水を飲み、正氣の國君を狂人とみなす國民達なのであり、いかに少數派であろうが自己の正義の信條を守る者こそが「不狂」であつた筈である。

前述のように、袁粲がそもそも『聖賢高士傳』のどの「高士」に自らをなぞらえて「妙徳先生傳」をたてたのかは、直接には知るすべが無い。然し「高士」が如何なる種類の人物を指すのかを推し量ることはできる。例えば現存する皇甫謐『高士傳』には、「漁父辭」に材を仰いだ「漁父」なる一節が有る。そのあらまは、

楚の人である漁父は、楚國の亂れを見て名を匿し、長江のほとりに隱棲していた。頃襄王のとき、朝廷より追放された屈原に、獨り孤高を守つて濁世と相容れざることの非を説き、再び何處かへと立ち去つて誰もその消息を知る者は無かつた。

というものである。即ち「高士」とは、「漁父辭」に、

聖人不凝滯於物 聖人は物に凝滯せず

而能與世推移 而して能く世と推移す

と云うような生き方を選ぶ、つまりは頑なに自己の信念を

曲げないというのではなく、世の趨勢に身を任せて生きてゆく漁父のような類の人物を指すのだと考えられる。

屈原の、

世を擧げて濁れるに 我れ濁り清めり

衆人皆酔うに 我れ獨り醒めたり

という述懐に表わされるような道德的潔白さを亂世に全うすることの困難を、袁粲は誰よりもよく知っていた。だからこそ「物に凝滞せ」ざる「高士」たらんとする誘惑も存在したに違いない。そして、彼にとつて「高士」となることは、自分が狂泉の水を飲み正氣を失つて、世を蔽う狂氣に身を委ねることを意味した筈である。¹⁴⁾

次に、放翁が「漁父辭」を用いた「遂初」という詩を見つみよう。

狂本類三閭 狂せるは 本と 三閭に類う

歸仍慕二疏 歸るは 仍お 二疏を慕う

何由滿人笑 何に由りてか滿人の笑う

但可遂吾初 但だ 吾が初を遂ぐべし

奕奕沙堤馬 奕奕たり 沙堤の馬

栖栖下澤車 栖栖たり 下澤の車

細看俱外物 細看すれば 俱に外物

俛首老犁鋤 俛首 犁鋤に老いん

(遂初 卷六十)

嘉泰四年、八十歳のとき、郷里山陰での作である。我が「狂」はもとよりのか三閭大夫に類うもの、歸隱に際しては漢の疏廣・疏受の退き際を慕う、とうたう首聯は、「漁父辭」と『漢書』疏廣傳とを用いたものだが、先に掲げた袁粲の場合とは全くあべこべに、放翁は三閭大夫屈原を「狂」と認識していたらしいことが注意をひく。そもそも屈原の言では、

衆人皆酔うに 我れ獨り醒めたり

即ち正氣を失つた酩酊という異常な状態にあるのは自分を除いた世人すべてなのであって、自分自身はたとえ孤立することになろうと決して正道に悖ってはいないのである。無論、放翁にとつての「衆人」も決して彼に好意的な存在では有り得ない。世間的な名利に背を向け、自らの「初を遂」げることだけが己れに残された道なのだ、というのが

放翁の謂である。然し、放翁はかかる自己を「狂」と表現した。自分の信念に殉じ、天地神明に照らして恥ずることの有るまじき屈原の生き方、それにも等しい「狂」だと言うのだ。ここに端無くも、放翁が自己と自己を取り巻く社會との關係を如何に捉えていたかが表われているのであるまいか。

首聯の對構造を吟味すれば、ここで放翁が「狂」と表現した内容は、容れられる筈も無い對金主戰論を主張した自分の過去の行爲に關わるものと解釋できる。その自分を常軌を逸した異常者だと形容する彼の眼は、少なくとも單純な好戰家のものとは異なっている。彼は時世から突出した自分自身を自覺し、また自分の置かれた状況を明確に把握していたのではないか。従つて彼に屢々冠せられる「愛國詩人」という稱號は、そうした事情を無視した些か亂暴なもののように私には思われる。

以下、『詩稿』に於ける「狂」について更に詳しく論じようと思うが、ここではまず、放翁には自己の異常さについての自覺が有つたということを指摘しておきたい。

『劍南詩稿』における詩人像（西岡）

二

前述の如く、乾道八年（一一七二）、放翁は對金前線基地興元を離れて成都へと下り、淳熙二年（一一七五）には四川制置使として蜀に赴いた范成大のもとで參議官となるが、翌三年には早や職を辭し、祠祿を受ける生活にはいる。そのような境遇に在つて放翁は淳熙四年、五十三歳の時に「大風登城」（卷九）という詩を作っている。

風從北來不可當	風	北より來たりて當るべからず
街中橫吹人馬僵	街中	に横吹して人馬僵る
西家女兒午未妝	西家の女兒	午にして未だ妝わず
帳底爐紅愁下牀	帳底	爐は紅に 牀より下るを愁
東家喚客宴畫堂	東家	客を喚びて畫堂に宴す
兩行玉指調絲簧	兩行の玉指	絲簧を調ぶ
錦繡四合如垣牆	錦繡	四合して垣牆の如く
微風不動金貌香	微風	動かさず 金貌香
我獨登城望大荒	我れ獨り	登城し 大荒を望み

勇欲爲國平河湟 勇んで國の爲に河湟を平げんと欲す

す

才疎志大不自量 才疎にして志は大 自ら量らず

西家東家笑我狂 西家 東家 我が狂を笑う

北方より吹き來つて人馬をたおす大風とは、中原を領有

する異民族の盛んな勢いと南侵の氣配とを譬えるものであ

らう。然し、ぬくぬくと寢穢い西家の女兒も、座敷で宴に

うつつをぬかす東家の輩も、外の世界にはお構い無し。七

句目「錦繡四合」という表現は、放翁の北方回復への思い

が單に女眞に對する敵意であるだけでなく、外界の在り様

に腐心することを知らぬ宋朝下の人士への憎悪でもあった

ことを窺わせる。また八句目「微風不動金猊香」からは、

その憎惡の遣り場の無いもどかさも傳わつてこよう。か

くて西隣にも東隣にも、獨り北方に思いを馳せるなどは

狂氣の沙汰よと笑われる放翁ではある。が、その振舞いは

單に周圍の俗人達の眼にのみ奇異に映つたのではなく、寧

ろ「才疎志大不自量」と自身を表現する放翁こそ、誰より

もその現實離れした非常識さ加減を識つていた筈である。

憂國の志を煙の涌き立つ如くに燻らせる自分自身を外側から凝視する、客觀的な詩人としての眼がそこには有る。

かく自分自身を「狂」と客觀視してみせた詩人は何も放翁に始まるわけではない。我々はその代表例として杜甫を擧げることが出来る。「狂夫」は杜甫の成都時代の作である。

萬里橋西一草堂 萬里橋の西なる一草堂

百花潭水即滄浪 百花潭の水 即ち滄浪

風含翠篠娟娟靜 風は翠篠を含みて娟娟として靜かに

に

雨裏紅蕖冉冉香 雨は紅蕖を裏して冉冉と香ぐわし

厚祿故人書斷絕 厚祿の故人 書は斷絶し

恒飢稚子色淒涼 恒に飢うる稚子は 色淒涼

欲填溝壑唯疎放 溝壑に填まんと欲して唯だ疎放

自笑狂夫老更狂 自ら笑う 狂夫 老いて更に狂なるを

るを

(錢注杜詩 卷十一)

この詩では、厚祿や名聞などの現世的價值觀から懸隔す

るを餘儀無くされた杜甫が、飢えて痩せおとろえた幼な兒を胸に外界を凝視している様子が感じられる。首聯・頷聯の調和を得た静けさのなか、「狂夫」の「疎放」なる姿を描くところに、杜甫が今後の自分の進むべき道に對し持っていた一種昂然たる気分を見ることができよう。

「秦州を發す」を始めた杜甫の秦州滞在期以後の作品に現われる「吾道」という語を軸に、詩人としての自覺の杜甫の場合をも、小川環樹氏は論じておられる。秦州に於ける一連の内向的作品群を経て成都に辿り着いた杜甫が詠じたこの「狂夫」には、科擧に應じ官僚として出世することではか人間の價値を判斷しない社會内で、自分が「詩人としてしか評價されないことへの不滿」も見え隠れする。然しそもそも「狂」とは『論語』に

中行を得て之れに與せずんば、必ずや狂狷か。狂者は進みて取り、狷者は爲さざる所有り。

(子路篇)

と言うように、孔子が行動を共にするものとして評價（次善という形ではあるが）した積極的性質でもあった。これを杜甫にあてはめれば、名聞や厚祿といった價値觀を棄て、

『劍南詩稿』における詩人像（西岡）

一途に「吾道」を往かんとする心意氣を彼は「狂」と表現したと考えることもできよう。

放翁も杜甫と同じく詩人として生きる他は無いという自覺を持っていたことについては前述した。然し放翁が「狂」と表現するのは主として國土回復の志を捨て切れぬ自分であり、杜甫の場合とは些か事情を異にする。のみならず、こと「狂」という詩語に關する限り、放翁がそれによつて構築した世界は從來の詩人達に比してはるかに複雑である。唐突だが、蝶に關聯して用いられる例などはその典型だろう。嘉定元年、八十四歳の作、「雙蝶」を掲げる。

庭草何離離 庭草 何ぞ離離たる

清晨露猶溼 清晨 露 猶お溼う

草頭兩黃蝶 草頭の兩黃蝶

爲我小佇立 我が爲に 小しく佇立せよ

秋光亦已晚 秋光 亦た已に晚く

行見霜霰集 行くゆくは 霜霰の集まるを見ん

方春不盡狂 春に方りて狂を盡さずんば

汝梅尙何及 汝 梅ゆとも 尙お 何ぞ及ばんや

吾生更堪笑 吾が生 更に笑うに堪う

去日如電急 去日 電の如く急なり

功名竟何在 功名 竟に何くにか在る

惆悵劍鋒澀 惆悵す 劍鋒の澀るを

(卷七十八)

擬人法とは一種の感情移入であり、「我が爲に小しく佇立」しようとする雙蝶は、蝶と對話する放翁自身の心を投影する存在である。春の間に「狂を盡くさ」なければ後悔しても間に合わんよ、と話しかける放翁の心には、功名を得ること無く一瞬のうちに過ぎた去りし日への思いが、何にも増して蟠っているのだ。

蝶は放翁であり、放翁は蝶である。

杜鵑血盡啼未歇 杜鵑 血 盡き 啼いて未だ歇ま

ず

蝴蝶夢殘心更狂 蝴蝶の夢 残われて 心更に狂

我自人間少情者 我れ自ら人間に情少なき者

老來十倍惜年光 老い來って 十倍 年光を惜しむ

(初夏十首其六 卷三十二)

「蝴蝶夢」は勿論、『莊子』齊物論篇の故事である。この二句目は「自ら喜ぶ」(卷七十五)の二首目の句、「喚び醒ます 狂蝶の夢」等、他の用例を考慮するに、夢醒めてなお、心は「更に狂」なる状態に驅り立てられる、と言うのであろう。この他にも「狂」を飛蝶の形容に用いる例は多い。

少年騎馬入咸陽 少年 馬に騎り 咸陽に入る

鵲似身輕蝶似狂 鵲は身の輕きに似 蝶は狂せるに

似る

(晚春感事四首其四 卷二十二)

放翁の蝶そのものに對するイメージは、

人生安得如汝樂 人生 安くんぞ汝が樂に如くを得

んや

(蝶蝶詞 卷十二)

と云うが如く、生きることの勞苦から逃れ、意のままに飛びまわる存在への憧憬を伴うものと言える。その蝶を『莊子』を時に用いながら「狂」と表現するとき、詩語としての「狂」は單なる異常さを意味するに留まらず、そこに現

實世界のしがらみから離脱して自由に飛翔するというイメージが賦與されていると考えられる。

社會に於ける狂人の疎外という問題を論じ續けたミッシェル・フーコーは、狂人を、人間のあらゆる活動領域にわたって疎外される周邊的 (margin) な存在と定義した。⁷⁾ この周邊性という概念は、精神病理學用語たるの如何を問わず、「狂」ということばを論ずるに際して一つの卓抜した視座を與えてくれる。中國の詩人が「狂」という表現を用いる時も、周邊性の存在は必ず意識されていよう。とりわけ中國に於ける所謂讀書人達は、科擧に及第し榮達する手段たる書物を學ぶことによりその階級集團への歸屬が許されたのであって、詩作などという一小伎を己れの使命として選擇するのは、杜甫の時代の人々にとつてはそれこそ狂氣の沙汰であつたろう。「狂夫」からその間の事情は察することができるとし、その意味で彼も所謂周邊人である。人に師事して道を學ぶことを知らぬ風潮のなか、獨り弟子をとり學を講じて「狂名を得」⁸⁾ た韓愈の場合からも、載道の理念の爲には既存の社會から孤立することも辭さなかつた

『劍南詩稿』における詩人像 (西岡)

彼の苛烈さを窺い知ることができる。

周邊性という視座を以て不遇の人、陸放翁の人生を眺めれば、様々な詩のモチーフがそこに淵源するものであろうことが想像される。但し、傳記的事實と詩との關係を論ずるのは私の目的ではないから、過度の穿鑿は避けつつ放翁の表現を問題にしてゆきたい。

先程挙げたのは、「狂」が蝶の飛びあるく様子に關聯して用いられる例であつた。時に『莊子』の「蝴蝶」を媒介として、「狂」は天涯孤獨の周邊性を示すものから、その周邊性を寧ろ逆手に取り、現實とは別の世界へと自由に飛翔するものとしてイメージされることも有る。次の「狂歌」などはそれがより鮮明に表出された作品と言えよう。

少年雖狂猶有限	少年	狂すと雖も	猶お限り有り
遇酒時能傲憂患	酒に遇い	時に能く憂患を傲る	
即今狂處不待酒	即今	狂處	酒を待たず
混混長歌老巖澗	混混	長歌して	巖澗に老ゆ
拂衣即與世俗辭	衣を拂いて	即ち世俗と辭し	
掉頭不受朋友諫	頭を掉いて	朋友の諫を受けず	

挂帆直欲截煙海

帆を掛け 直ちに煙海を截たんと欲し

策馬猶堪度雲棧

馬に策うち 猶お雲棧を度るに堪う

枵然癡腹肯貯愁

枵然たる癡腹 肯えて愁を貯えんや

天遣作盜盛藜覓

天 盜を作り 藜覓を盛らしむ

髮垂不櫛性所使

髮垂れて櫛くしらざるは 性の便とする所

衣垢忘濯心已慣

衣垢 濯うを忘るるは 心已に慣る

眼前故人死欲無

眼前 故人 死して無からんと欲す

此生行矣風雨散

此の生 行けり 風雨のごと散ぜん

羞爲塵土伏轅駒

塵土の轅に伏するの駒と爲るを羞ず

寧作江湖斷行雁

寧ろ 江湖の斷行の雁と作らん

(卷十五)

淳熙十年、五十九歳のとき、郷里山陰での作。題からも内容からも「狂」をテーマとして貫いた一篇であることは判然とする。特に七・八句目のイメージに留意しつつ、今一首を掲げよう。淳熙十六年、六十五歳の時、臨安での作「我が夢」である。

我夢入煙海

我れ 夢に煙海に入る

初日如金鎔

初日 金の鎔くるが如し

赤手騎怒鯨

赤手 怒鯨に騎し

横身當渴龍

横身 渴龍に當る

百日京塵中

百日 京塵の中

詩料頗闕供

詩料 頗る供するに闕く

此夕復何夕

此の夕 復た何の夕ぞ

老狂洗衰慵

老狂 衰慵を洗う

夢覺坐歎息

夢より覺め 坐ろに歎息す

杳杳三荊鐘

杳杳 三荊の鐘

車馬動曉陌

車馬 曉陌に動き

不竟睡味濃

睡味の濃やかなるを竟えず

平生擊虜意 平生 擊虜の意

裂皆髮上衝 皆を裂き 髮 上衝す

尙可乘一障 尙お一障に乘じ

憑堞觀傳烽 堞に憑り 傳烽を觀るべし

(我夢 卷二十)

「陸游が今生きていて、私があなたはほんとうにあんな夢を見たのですかと問うたならば、たぶん笑って答えないだろう。」とは小川環樹氏の言である。⁰⁹ ここでも實際にみた夢か否かを問題にするにはさしあたってあまり意味が有るまい。

まず、「狂歌」の七・八句目と「我が夢」の出だしとの相似が注意を引く。即ち、放翁が「狂」に對して持っていたイメージ（夢想）の一つは、煙にかすむ海を勇壯に突切る騎鯨の客であり、馬に策うって雲棧をわたりゆく壯士であつた。そしてそれらはたとえ「老いらくの狂」（「我夢」であろうと、放翁にとつては「衰慵を洗」う「詩料」であつたのだ。故に、話は前後するが、蝶の形容として用いられた「狂」という語も必ずや「栩栩然」¹⁰の單なる言い換え

『劍南詩稿』における詩人像（西岡）

に留まるものではないだろう。それは現實的地平からの飛翔への契機を持ち、その結果として出來する自由な存在への志向を有するものであろうことが、ここで今一度首肯されてよい。

更に「狂歌」・「我が夢」それぞれの結びもまた興味深い。「我が夢」の末四句は一見唐突な感じを與えるが、全體的な結構を考慮すれば、彼はおそらくもう一度夢想の世界へ戻って行くのである。それは最初の四句に放翁が「虜を撃つ」勇士のイメージをオーバーラップさせていたことを示すであろう。とすれば放翁にとつて、「狂」が先ず國土回復への積極的な願いを表わすものであつたこともここで更に明らかになる。

然し、自由な夢想の世界から現實に戻つた時、放翁を待っていたのは孤立だけだつた。「狂歌」の結び、

塵土の轆に伏するの駒と爲るを羞ず

寧ろ江湖の斷行の雁と作らん

には、現實界の「狂」人には免れ得ない周邊性（江湖・斷行雁）が表出される。が、それでも夢想としての「狂」を

心に抱く放翁は飛翔（駒に對する雁）、及びそれを選択する意志（寧）を捨てようとはしない。淳熙十年、前途に待つ幾度かの出仕を前に放翁は、自分の異常さと孤立とを自覺しながらも、已に自分を詩人へと追い遣った世界への訣別をうたっているのである。

三

詩人が自己を「狂」と表現すること自體、自分自身に對する第三者的な視點が詩人に存在することを意味する。これまで述べてきた作品に關して言うなら、放翁はその視點に據りつつ、自己に内在する憂國的心情を、様々な「狂」の相に於いて顯在化してみせたのである。

ここに「陽狂」という語が存在する。（語義は同じだが「佯狂」、「詳狂」等の形でも用いられる。ここでは『詩稿』の用例に倣って「陽狂」と言った。）「狂と陽る」、即ち狂人のふりをするのである。『論語』微子篇に於ける楚狂接輿、『史記』宋微子世家（又は『大戴禮』保傳）に於ける箕子らをその祖型とする。彼らはいずれも「政令に常無」²¹き

を憾み、狂人を裝って仕えなかった。楚狂接輿は、

鳳よ鳳よ、何ぞ徳の衰えたる。往者は諫むべからず、

來者は猶お追うべし。已みなん已みなん、今の政に従

う者は殆うし。（論語 微子）

と歌いつつ孔子を過り、箕子もまた、琴曲「箕子操」を傳えたという。²²放翁の一族、山陰の陸氏はこの楚狂接輿（陸通）の後裔だそうだが、その當否はともかく、『詩稿』に於いて「陽狂」を言う時、放翁は箕子よりも接輿をより多く念頭に置いていたものと思われる。²³

淳熙二年、五十一歳の時、成都での作「樓上醉歌」にその最初の用例が見える。

我遊四方不得意 我れ四方に遊びて意を得ず

陽狂施藥成都市 陽狂 成都の市に施藥す

大瓢滿貯隨所求 大瓢 滿ち貯えて 求むる所に隨

い

聊爲疲民起憔悴 聊か疲民の爲に憔悴より起たしむ

瓢空夜靜上高樓 瓢空しく 夜靜まりて 高樓に上

り

買酒捲簾邀月醉 酒を買い 簾を捲き 月を邀えて

酔う

醉中拂劍光射月 醉中 劍を拂えば 光 月を射

往往悲歌獨流涕 往往 悲歌し 獨り流涕す

剗却君山湘水平 君山を剗却せば 湘水平らかに

斫却桂樹月更明 桂樹を斫却せば 月 更に明らか

ならん

丈夫有志苦難成 丈夫 志有るも成り難きに苦しむ

修名未立華髮生 修名 未だ立たずして華髮生ず

(卷六)

『埤雅』の撰者陸佃の孫である放翁が、本草の學に通じ藥草を扱うひとでもあったことは『詩稿』に屢々言及される。疲弊した民に藥を施すという表向きの生活の裏では、世を濟わんとする志の成り難きを思いつつ白髮頭を嘆く詩人の自畫像がここでは描かれる。「陽狂」たること、それは放翁にとって無論意に染まぬことであるようだが、一方では、

避俗欲陽狂 俗を避け 陽狂たらんと欲す

『劍南詩稿』における詩人像(西岡)

(村舎雜興五首其五 卷六十一)

と言うが如く、「俗」の名で一括されるべき世界からの意識的離脱のための手段でもあった。政治的・社會的現實に對して直接には口を噤んで語らず、「狂」を演じながら江湖に隠れるという態度をそれは意味する。

ここで一旦、これまでを振り返ってみよう。「狂」という詩語が、放翁の場合、逆虜を撃つ勇壯なる士に關聯したイメージを持つことを私は前章までに述べてきた。そのイメージと、ここでの「陽狂」とのニュアンスの違いを指摘しておく必要がある。

憂國の士としての志を持つ自分を「狂」と言う場合、それは確かに周圍から笑止の沙汰と片付けられるような態度を表わし、また放翁自身にもかかる自分を異常だと見做す自覺が有った。然し(蝶の例からも推察できるように)それは少なくとも放翁にとって、青春期に燃焼し盡さねばならなかったものであり、また彼はその志を放棄するに忍びない感情を抱いていた筈である。ところが、演じられた狂態としての「陽狂」の場合、その狂態は自分自身が抱いて

いる志を隠すための假面であるに過ぎぬ。楚狂接輿を例にとれば「陽狂」とは世に理想が行われぬことを知りながら沈黙を守り、時に孔子のような存在に對して箴言めいた歌を聴かせるぐらいが精々の、所謂隱者的な生き方を表わすものと言える。(私はこの稿では楚狂接輿の故事の典據を『論語』に仰いだ。が『莊子』人間世篇にやや詳しい形で説かれる接輿の話では、理想の實現を目指す孔子と、「與えられた自己を與えられた現在のなかでいかに生きるか」²⁴⁾がすべてである接輿との對照性が、より際立つた形で展開されている。)

放翁の場合について更に考えれば、彼が自分の醉態を戯れに「楚狂」と呼ぶような例は考慮の對象から除外するとして、

棄官雖未決	棄官	未だ決せずと雖も
世念亦已且	世念	亦た已に <small>かりよ</small> 且なり
浩歌續楚狂	浩歌	楚狂を續ぎ
幽懷欣獨寫	幽懷	獨り <small>す</small> 寫ぐを欣ぶ

(秋郊有懷四首其一 卷十九)

などと詠ずる場合、「陽狂」(「楚狂」)はあくまで俗界を避けて隱棲すること、及びその手段なのであって、積極的な主張や態度などを意味しているのではない。それは一方で、

陽狂自是英豪事	陽狂は	自らは英豪の事
村市歸來醉跨牛	村市	歸り來り 酔いて牛に跨る

(西村醉歸 卷十三)

とうたわれることもある。この「英豪の事」のモチーフは放翁には早くから存在し(例えば卷三「蟠龍瀑布」)、表向きは靜穩に暮らしていても一旦事有らば勇躍する臥龍の如き士は、彼の好んで詠ずる所であった。ここでは彼はその眞の姿を偽るために狂人のふりをするわけである。そう考えると「陽狂」は矢張、「志を韜晦し隠れ棲むという態度、及びその手段」という意味を出ることは無いだろう。

そこで今度は、先に挙げた「樓上醉歌」と、二章の最初で論じた「大風登城」の兩者の結構に目を向けてみよう。「樓上醉歌」では、表面上は現實に對して何の不平も無い素振りをし、市中に生活することを「陽狂」と言っている。従って、夜、樓に上って國を憂え悲歌流涕する時の放翁は、

もはや狂態の演技者ではなく素顔の自分自身の筈である。ところが「大風登城」では、かかる憂國の志を持つ我が身を、彼は「狂」と表現しているのである。

話を整理しよう。「陽狂」とは放翁にとってあくまで、己れを晦まし、俗世より懸隔せんがために執られた一手段であつた。それは狂態を演ずる、つまり世間に對する無知・無關心・無關係を装ふことにより、本來の自己を全うせんとする態度の表明である。然らばその本來の自己とは何か。先の「樓上醉歌」や「西村醉歸」等から推し量るに、江湖に隱棲しながらも北方の失地回復への志を服膺し続けることこそそれに違い無い。ところが、演じられた狂態の假面を剥がしたあとに顯わになる筈のその壯士としての素顔をも放翁が「狂」と客觀視してみせること、前章に述べた通りである。謂わば「陽狂」とは、「狂」なる自己を世の目から隱匿するための假面の役割を擔っているとも言える。逆に言えば、演じられた狂態の裏側に、もう一つの「狂」の層が有り、放翁はそうした自己の諸相を第三者の視點から眺めているわけである。

『劍南詩稿』における詩人像（西圖）

そもそも「狂」という自己表現は、放翁の如何なる意圖より出たものなのか。またそれは『詩稿』全體のなかでどのような位置を占めるのか。今度は角度をかえて更に具體的に論じてみよう。

四

一般に憂國の詩人として名高い放翁が、農民や農村生活に取材した詩をも數多く遺していることは言うまでもない。そもそも南宋という時代が、詩材としての農村生活の成熟と、それをリアルに描く詩人の技とが結實を見せた時代なのであり、放翁のみならず、范成大などはその趨勢を代表する典型的な詩人である。

そうした一連の作品群を通して、放翁の場合に特に興味深いのは、彼が「太平」という語を屢々用いることである。慶元二年、七十二歳、山陰での作、「北園雜詠」にいう。

鋤麥家家趁晚晴	麥を鋤 ⁺ きて	家家	晚晴を趁い
築陂處處待春耕	陂を築きて	處處	春耕を待つ
小槽酒熟豚蹄美	小槽	酒熟し	豚蹄美し

剩與兒童樂太平 剩え兒童と太平を樂しむ

(北園雜詠十首其五 卷三十五)

また慶元四年、同じく山陰での作、「夏日」にも、

梅雨初收景氣新 梅雨 初めて收まり 景氣新たに

太平阡陌樂閑身 太平の阡陌 閑身を樂しましむ

陂塘漫漫行秧馬 陂塘 漫漫 秧馬行き

門巷陰陰挂艾人 門巷 陰陰 艾人を挂く

白葛烏紗稱時節 白葛 烏紗 時節を稱し

黃雞綠酒聚比鄰 黃雞 綠酒 比鄰を聚む

掀髯一笑吾眞足 掀髯 一笑す 吾れ眞に足れり

不爲無錐更歎貧 錐無きが爲にとて更に貧を歎かず

(夏日五首其五 卷三十七)

とうたっている。

政治に對する現實的な志向の強い中國の詩文に於いて、

「太平」という語が用いられる場合、そこにはまず理想的な政治體制下にあつてはじめて現出されるべき秩序有る治世が意識されていると言つてよいだろう。然し、南宋という天下の半壁を保つのみ王朝の場合はどうだろうか。た

とえ一時的な小康状態を保ち、自領内での安定を得たとしても、それは異民族との間に結ばれた叔・姪という屈辱的外交關係下で、莫大な歳幣を支拂うことにより保障された假の平和に過ぎない。その状況を「太平」と呼ぶことは、南宋の人士にとって必ずや或る程度の憚りの有ることであつたに違ひない。

實際、この時期の代表的詩人である范成大や楊萬里らの詩集にこの「太平」という語は殆ど皆無である。范成大的『石湖集』に於ける一つの用例が、その事情を雄辯に物語つていよう。

汗後驚梨爽似冰 汗後の驚梨 爽なること冰に似る

花身耐久老猶榮 花身 久しきに耐え 老いて猶お

榮ゆ

園翁指似還三笑 園翁 指似し 還た三たび笑う

曾共翁身見太平 曾て翁が身と共に太平を見ると

(内丘梨園石湖居士詩集 卷十二)

彼にとつて、「太平」とは自分の眼前に存在するようなものではなかつたのである。范成大が代表作として著名な

「四時田園雜興」や「臘月村田樂府」で農村の幸福をうた

(卷六十九)

うような場合は、「豊年」等の表現を用いることはあつても、「太平」という言い方はせずにリアルな客観描寫に終始するのが常である。それに比べ、一般に「愛國詩人」を以て稱される放翁が、餘りにも簡単に「太平」を謳歌してしまうことは如何にも奇異に映る。「愛國」の「國」とは何も淮水以南の地を限定して言うわけではあるまい。放翁が女真族の占領地に於ける舊宋朝治下の人士の在り様に腐心し續けたのは明白であるし、最終的に漢人全體・中國全土にわたる安寧秩序の回復をめざしたという意味で「愛國詩人」の名が有るのだろう。

當然のことを言うようだが、北方には「太平」という状態が存在しないことに放翁は言及している。開禧二年、八十二歳の作、「冬晴」の頸・尾聯には、

倉庾家家儲舊穀 倉庾 家家 舊穀を儲え

笙歌店店賣新醪 笙歌 店店 新醪を賣る

太平氣象方如許 太平の氣象 方に許の如し

寄語殘胡早遁逃 寄語す 殘胡 早に遁逃せよ

とうたう。平和な治世を現出させた王土の威光により異民族を驅逐しようとする願いがここには込められていようが、逆に言えば「殘胡」のいまだ「遁逃」せざる土地には「太平」など有りはしないのである。歌行體の「焉耆行」は、古の將軍像を借りて國土回復の希望を想像の世界に託した作。尾聯にいう。

十年牛馬向南睡 十年 牛馬 南に向きて睡る

知是中原今太平 知る 是れ 中原の今は太平なる

を

(卷十八)

中原以北の地が「太平」だとは言っても、それはあくまで架空の世界のことに限られる。放翁にとつて「太平」とは矢張、南宋の治下にしか存在しないものであった。

具體的に「壬子除夕」をみてみよう。紹熙三年、六十八歳のとき、山陰での作である。

前村後村燎火明 前村 後村 燎火明らかに

東家西家爆竹聲 東家 西家 爆竹の聲

老逢新正幸強健

老いて新正に逢う 幸に強健なり

却視徂歲何崢嶸

却つて徂歲を視れば 何ぞ崢嶸たる

る

兒時祝身願事主

兒時 身を祝し 主に事えんと願

う

談笑可使中原清

談笑のうちに中原をして清からしむべし

むべし

豈知一出踐憂患

豈に知らんや 一たび出でて憂患を踐まんとは

を踐まんとは

斂縮豈復希功名

斂縮 豈に復た功名を希わんや

雪霜滿鬢覺死近

雪霜 鬢に滿ち 死の近きを覺ゆ

節物到眼空歎驚

節物 眼に到り 空しく歎驚す

蠶官社公正暖熱

蠶官 社公 正に暖熱

春盤儺鼓爭施行

春盤 儺鼓 争つて施行す

蓬門車馬所不至

蓬門は車馬の至らざる所

山僧野叟相逢迎

山僧 野叟 相逢迎す

嗚呼吾曹見事晚

嗚呼 吾が曹 事を見ること晩し

古俗實在蚩蚩氓

古俗は實在蚩蚩の氓に在り

茆簷一笑語兒子

茆簷 一笑し 兒子に語る

明當滿舉屠蘇觥

明くれば當に滿たし舉ぐべし 屠

蘇の觥

(卷二十六)

「太平」という語こそ用いていないが、ここに詠じられた郷里の情景がその内容に略ぼ相當するであろうことは想像に難くない。就中、十五・六句の兩句は、放翁が田園詩を自分の詩風に取り込むに至った一經緯を端的に表わしていよう。「事を見ること晩し」という謂わば悟りと言つてもいいような心理的事件は、彼の作品・傳記を吟味すれば、紹熙元年、六十六歳で初めてまとまった期間、郷里に隱退することとなつた頃、彼の内部で起こつたと考えられる。それ以後は田園詩の増加と同時に屢々「太平」の語も用いられるようになる。

確かに、小さな安寧を「太平」と言いくるめてしまふことと自體は、欺瞞だと言われても仕方の無い部分も有る。

東閣群英鳴珮集

東閣の群英 珮を鳴らして集い

北庭大戰捷旗來

北庭に大戰して 捷旗來る

太平事業方施設

太平の事業 方に施設せんとせし
に

誰遣晨雞苦喚回

誰か晨雞をして、苦おんじろに喚び回さし
めし

(記九月三十日夜半夢 卷三十三)

夷狄に痛快淋漓たる大捷を收め、「太平の事業」を中國全土に施かんことを夢みない放翁ではなかった。そのことを心に留めながら、郷里に於ける「太平」を詠じた彼にジレンマは矢張存在したのであろう。

そうした放翁の詩境を細かに考察するため、ここで今一度話を「狂」に戻そう。「夜賦」は慶元六年、七十六歳の作である。

月暈知將雨

月暈 將に雨ふらんとするを知り

風聲報近秋

風聲 秋に近きを報ず

暗廊行熠燿

暗廊に熠燿ほたる行き

深樹嘯鳩鷓

深樹に嘯鷓嘯こいつく

老幸傳家事

老いては幸に家事を傳え

狂猶爲國憂

狂しては猶お國の爲に憂う

『劍南詩稿』における詩人像(西岡)

相齊雖已矣

齊に相たるは已みぬと雖も

且復飯吾牛

且つは復た吾が牛に飯くわせん

(卷四十三)

國を憂えることを「狂」と呼ぶ放翁が選ってゆくのは、齊の桓公に拾われて宰相となった甯戚が暮らしていたような、牛に餌をやる草莽の間であった。甯戚とは、出仕の見込みが皆無だという點が違っているが。

この場合、放翁が積極的に『論語』子路篇に於ける「狂者」の如く、追求するものは、中國全土にわたる「太平の事業」(記九月三十日夜半夢)の實現に違い無い。然し、周邊人たる彼にとって自分自身は「齊に相たるは已みぬ」る存在であり、理想の實現のためには餘りにも無力であった。

もしも彼が現状を變革しようとする意志と力とを備えた愛國者として自分を認識していたならば、憂國の情をたぎらせる自分自身が「狂」であるなど、彼にとって是最も言いたくない事であった筈である。「狂」と自らを規定することにより、彼はおそらく現實的價值を奉じ政治的願望の實現を盲信して生きる人間たることをやめ、新たな詩世界

を創出し、そこに現實的地平から或る意味で離れた、自畫像を描く創造者としての道を歩み始めているのだ。逆に言えば現實的・社會的なレベルでの成功を「細看すれば俱に外物」(遂初)と見切った時、「狂」人を自任する放翁の眼に映じた、自らの「異常さ」に對する「正常さ」は、寧ろ「常識」に滿ち溢れた唾棄すべき俗物の集合としての社會であつたに違い無い。彼は「常識」の支配する世界から自由である周邊的存在となることにより、詩人として眞に據つて立つ基盤を獲得したと私は考える。

故に放翁の所謂愛國的な詩篇は、國家に對する忠誠心が單にそのまま作品化したようなものだとは言ひ難い。頑迷に國土回復を主張する行爲を「狂」と表現し、現實的價値觀との關りに於ける自己を否定する。そこからもたらされるのは愛國心ではなく、徹底的な無力感である。朱東潤が「樂觀的戰鬥精神」⁶⁰⁾と呼んだような、高揚した若さの只中に在った過去の自分を顧みる時、その無力感はいやが上にも増したであらう。

自蜀還吳會 蜀より吳・會に還り

先憑劍換牛 先ず劍に憑りて牛に換う

掃除狂習氣 掃除す 狂習氣

謝絕醉朋儔 謝絶す 醉朋儔

去死時猶遠 去死 時は猶お遠きも

餘生已覺浮 餘生 已に浮きたりと覺ゆ

即今眞憊矣 即今 眞に憊れたり

閉戸尙何求 閉戸 尙お何をか求めん

(感舊 卷七十)

偶思五十年來事 偶たま五十年來の事を思う

顧影燈前自笑頑 影を燈前に顧み 自ら頑なりしを笑う

(寒夜偶懷壯遊有感 卷七十九)

と言うように、郷里に退き、來し方を回顧する放翁が詠ずる詩は、彼の無念さ・無力感及びそうした自己を靜かに眺める詩人自身の眼を感じさせる。この無力感こそが、放翁の後半生⁶¹⁾の詩的世界の形成に大きく與つたと私は考える。再び「太平」について言えば、かかる詩人としての放翁の胸裏に有つたその語の本質は、皇天を戴く巨視的に見た

世界の秩序、つまり俗物のたむろする朝廷をはじめとした社會の働きを介在して實現されるべき理念というよりも、寧ろ農民の表情や農村での生活などの細部に宿る充實感、即ち彼の詩的世界に於いて表現され顕在化されるべき現象であったと言うことが可能だろう。事實、彼の創造した詩的境地が、ナシヨナリズムに由來する國家統一の悲願などという次元とは全く別の新鮮さ・豊饒さを備えたものであることは何人も否定し得まい。「愛國詩人」と呼ばれる放翁だが、その當人は必ずしも件の「國」というレベルでのみ思考し、詩作していたわけではないのだ。そういう意味で社會的な^{たが}をはめられていなかった放翁なればこそ、彼の農村描寫が范成大のような客觀描寫に留まらず、農村への主觀的思い入れの激しさを感じさせる形にも結實したのだと私は考える。放翁の田園詩は、自己に對する深刻な無力感の代償とまではいかぬにせよ、少なくともそうした感情が發條のように作用し、或る程度の影響を及ぼした結果できあがったものであることが認められてよいのではないか。

『劍南詩稿』における詩人像（西岡）

ここで詩人としての放翁のすべての面を論じ盡すということはできないが、彼の所謂愛國者としての一面と田園詩との關係について、私なりの一つの理解を以上に示した。最後に、そうした作品を創造し續けた放翁にとって、詩人としての自覺がいかなる形で関わっていたのかを考えて結びとしたい。

五

放翁は生涯にわたって「狂」たる自己を描き續けた。それは、彼が自分自身を時代に於ける徹底的な孤立者、つまり周邊的な存在として位置付けたことを意味する。確かに彼は「太平」の表現對象たる田園のなかに在り、それを詩に詠じもした。だが、飽くなき追求者としての「狂」は彼の内部で消滅してしまつたわけではない。遺作「兒に示す」はそうした放翁の心理の裏を示す好例だろう。當然「常識」の支配する社會から見れば彼は周邊人たらざるを得ない。かといって彼は農民そのものに収まつてしまつたわけでもない。

かかる自己を理解する人間が、同時代には皆無に等しいことを放翁は承知していた筈である。六十八歳の時、彼は「青山白雲歌」をうたっている。

青山白雲翁 青山白雲の翁

放浪酒中死 放浪 酒中に死す

埋骨長松根 骨を長松の根に埋め

夜夜聽谿水 夜夜 谿水を聴く

松老會作薪 松も老ゆれば會ずや薪と作り

骨朽會作塵 骨も朽つれば會ずや塵と作らん

但留千載狂名在 但だ 千載に狂名の在るを留むれ

ば

知我它年自有入 我れを知るに 它年 自ら人有ら

ん

(青山白雲歌 卷二十四)

「放浪 酒中に死す」とは、放翁がその半生を回顧して用いた象徴であろう。従つて「狂名」とは單なる醉態を指すのではあるまい(それも含みはするだろうが)。「狂名」——即ち社會内に於ける異常さと、その歸結としての孤立とを

體現した陸放翁という人物——その名を後世に知らしめる手段として彼に残されていたのは詩文を措いて他には無い。放翁にとつて詩はそのために有つたとまでは言えないだろうが、太史公司馬遷や「狂名を得」た韓愈らに自らを重ねながら、「寓懷」、「雨夜」、「道室戲詠」等の作で彼は同様の感慨をもらしている。⁸⁴

元來、詩人としての稱號は放翁が心から望んだものではなかつた。然し、六十二歳で時の皇帝孝宗に「嚴陵は山水の勝處、職事の暇には以て賦詠自適すべし」との言を賜わつた放翁は、皮肉なことに詩人としての名聲ばかりが高かつた。その彼を「或るいは有力者の牽挽する所と爲り、此の晩節を全うするを得ざらん」と評したのは朱熹だが、果して朱熹の「心配」通り、嘉泰二年、七十八歳の高齡で修國史に任命された放翁は、二年後に致仕、更に三年後の開禧三年、八十三歳で渭南縣開國伯の號を受けた。その時の詩が「恩を蒙り、渭南縣伯に封ぜらる、因りて渭南伯の印を刻す」である。

旋著朝衫拜九天 旋朝朝衫を著て九天に拜し

榮光夜半屬星躔 榮光 夜半 星躔に屬す

渭南且作詩人伴 渭南 且つは詩人の伴と作り

敢望移封向酒泉 敢えて望む 封を移し 酒泉に向

わんと

(蒙恩封渭南縣伯因刻渭南伯印 卷七十一)

起・承句は天にまで翔け上った自身の榮譽を敍して神妙だが、轉・結句からは文字通り一轉して諧謔めいたうたいぶりが感じられる。大真面目で渭南伯の印を刻している放翁が、まさか敵國の地など貰っても仕方無いと思っていた譯ではあるまいが、ここで「詩人」を持ち出し、杜甫「飲中八仙歌」を借り、領地替えて酒泉に赴きたいなどと「敢えて」であるにせよ、うそぶいてみせるあたり、當時の爲政者達に對する彼の醒めた眼が傳わってくるようである。勿論、放翁が渭南伯の號を輕視していたということは無く、そもそもその號に因む『渭南文集』の命名が放翁自身の遺志によるものであることが、息子の子適の跋に明記されている。

その昔、興元府に在った頃に、

『劔南詩稿』における詩人像(西岡)

會看金鼓從天下 會ず金鼓の天より下るを看んとな

らば

却用關中作本根 却つて關中を用つて本根と作せ

(山南行 卷三)

と主張した放翁にとって、元來陝西省渭南の地こそは失地回復への要であり、彼の志の象徴であった。然し、だからこそ「詩人」・「酒泉」といった語により渭南伯拜授の感懷を軽く詠してみせる放翁の胸裏には、詩人を自任する意地のような感情が存在したのではないかと考えるのである。

社會からの隔絶と無理解を痛感し、且つ、無力な自分を「狂」と表現し續けた放翁が、

蓋し人の情は、悲憤の中に積もりて言う無ければ、始めて發して詩と爲る。然らずんば詩無し。蘇武、李陵、陶潛、謝靈運、杜甫、李白、自ら已む能わざるに激す。故に其の詩は百代の法たり。

(澹齋居士詩序 渭南文集 卷十五)

と、不遇裏に生きた詩人達を論ずる時、たとえ詩そのものが彼の前半生で仕方無く選ばれた道であったという事情が

有つたにせよ、百代の後に自分の姿を伝える詩人としての自負を彼は持っていただろう。その自負を獲得する爲には、逆に言えば「狂」、即ち同時代からの徹底した孤立、そしてその自覺が必要だったと言える。

詩人とは、讀者の眼を前提として始めてその存在が意味を持つ。その讀者に向つて放翁が「狂」なる自分を描くとき、彼の腦裏に有つたのは自分の持つ悲憤等の感情そのものではなく、世界の孤兒としての自分の姿であつただろう。南宋という時代に於いて、自分という人間が如何に生き、如何に蹉跌し、如何に夢想し、如何に死んでいったのか。それを同時代に訴えるよりも寧ろ後世の讀者に伝えるのが、陸放翁という「狂」の詩人を支配した最終的なテーマであつたのではないか、私にはそう思われてならない。そのような道を辿らねばならなかつたことは、放翁自身にとつては矢張不幸を意味したのかもしれぬ。然し、後の世に生きる我々が放翁の遺した詩を眼にする幸いを思うとき、「狂名」を千載に留め得た「百代の法」たる詩人は、揺るがぬ名譽を得たといふべきだろう。

注

- (1) 以下「詩稿」と略す。本稿に於ける底本は、『劍南詩稿校注』（錢仲聯校注、上海古籍出版社、一九八五）を用いた。この本は、陸游詩の全てを収めるものとしては唯一の毛氏汲古閣本を底本とし、宋刻殘卷を始め數種の選集類をも廣く用いて校勘を施しているので、テキストとしては最良と考えられるからである。論文中の引用はすべてこの校注本により、各々にその卷次を記す。
- (2) 小川環樹「詩人の自覺——陸游の場合」（寛文生『梅堯臣』岩波書店付録）。
- (3) 「初冬雜詠」八首其五、卷七十九。このような例から、私は前掲「劍門道中遇微雨」について、放翁が入蜀後、詩に新たな境地をひらいた唐・宋の詩人達を思い、また驢馬に乗る自分に唐の賈島らを重ね合わせて詠じたものだとする錢鍾書氏の解釋（『宋詩選注』錢鍾書注、人民文學出版社）よりも、小川氏のことばに説得力を覺える。
- (4) 『誠齋集』卷二十七（四部叢刊本）。
- (5) 「喜楊廷秀秘監再入館」卷二十一。
- (6) 『詩稿』に於ける「狂」字の用例は凡て三二七首（三三六例）。
- (7) 『論語』子路篇「子曰、不得中行而與之、必也狂狷乎、狂者進取、狷者有所不爲也。」
- (8) （原文）昔有一國、國中一水、號曰狂泉。國人飲此水、無不狂、唯國君穿井而汲、獨得無恙。國人既並狂、反謂國主之

不狂爲狂、於是聚謀、共執國主、療其狂疾、火艾針藥、莫不畢具。國主不任其苦、於是到泉所酌水飲之、飲畢便狂。君臣大小、其狂若一、衆乃歡然。我既不狂、難以獨立、比亦欲試飲此水。

なお、この説話が直接に據つたものとして、荒井健教授より、『経律異相』(五十卷、大正藏第五十三卷收)卷二十八所收の「多智王伴狂免禍」の存在を教えていただいた。この話は「狂泉」と構造が基本的に同じであり、出典の問題こそ無しとしないが(章末に「出『雜譬喻經』第四卷」と記さるるも、『雜譬喻經』に第四卷は存在しない)、この説話を問題にする上で参考にすべき文獻であることを断わっておく。

(9) 『隋書』卷三十三、經籍志二、雜傳類に、「『聖賢高士傳贊』三卷、嵇康撰、周續之注」と見える。

(10) 斯波六郎『中國文學における孤獨感』(岩波書店)一〇七頁。

(11) ここでは作品及びその表現の次元に問題をとどめ、屈原という個人存在の有無についての議論は避ける。

(12) 斯波六郎、前掲書二九頁。

(13) 『太平御覽』卷五百七引皇甫子安『高士傳』漁父者、楚人也。見楚亂、乃匿名隱釣於江濱。楚頃襄時、屈原爲三閭大夫、名顯於諸侯。爲上官靳尚所譏、王怒、遷之江濱、被髮行吟於澤畔。漁父見而問之曰、子非三閭大夫歟、何故至斯。原曰、舉世混濁而我獨清、衆人皆醉而我獨醒、是以見放。漁

『劍南詩稿』における詩人像(西岡)

父曰、夫聖人不疑滯於萬物、故能與世推移。舉世混濁、何不隨其流、揚其波、汨其泥。衆人皆醉、何不餽其糟、飲其醕。何故懷瑾握瑜、自令放焉。乃歌曰、滄浪之水清、可以濯吾纓。滄浪之水濁、可以濯吾足。遂去、深自閉匿、人莫知焉。

皇甫謐『高士傳』は元來七十二人の人物の傳を収めていたらしい(宋・李石『續博物志』卷七の記載)。「太平御覽」に引く『高士傳』は略ぼこの數に一致するが、現行本『高士傳』には後人の手によるかなりの書き加えがある。いま假に『太平御覽』の引く『高士傳』と、現存する『聖賢高士傳』の一部(殿可均所輯)とを比べてみると、両者に重複する部分が少なくない。故に兩書は祖型を同じくするものとも考えられる。

(14) 袁粲は、齊王蕭道成の篡奪の野望を知り、これを阻もうとするが、結局「我れ忠臣たるを失わず」(『南史』卷二十六、袁粲傳)との言を遺し、命を奪われることになる。

(15) 小川環樹「吾道長悠悠——杜甫の自覺」(『中國文學報』第十七冊)。

(16) 前掲論文。

(17) ミッシェル・フーコー「狂氣と社會」、神谷美恵子譯(『みず』一三六號)。

(18) 柳宗元「答韋中立論師道書」(『増廣註釋音辯唐柳先生集』卷三十四、四部叢刊本)。

(19) 小川環樹『陸游』(筑摩書房)八五頁。

- (20) 『莊子』齊物論篇「昔者、莊周夢爲胡蝶、栩栩然胡蝶也……」。
- (21) 『論語』微子篇、楚狂接輿の條の疏「昭王時、政令無常、乃被髮佯狂不仕、時人謂之楚狂也。」
- (22) 『史記』卷三十八、宋微子世家「(箕子)乃被髮詳狂而爲奴、遂隱而鼓琴以自悲、故傳之曰箕子操。」
- (23) 『詩稿』卷六十一、「草堂」の尾聯、「浩歌陌上君無怪、世譜推原自楚狂」の自注に「陸氏舊譜云、本出接輿後」とある。錢仲聯氏も卷五十一「彷彿」の注で『山陰陸氏族譜陸氏世系本源』なるものを引用しておられるが私は未見である。
- (24) 福永光司『莊子』(朝日新聞社・文庫版) 内篇、二二三頁。自注：内丘鶯梨爲天下第一、初熟收藏、十月出汗後方佳。
- (25) 園戸云「梨至易種、一接便生、可支數十年。吾家園者、猶聖宋太平時所接。」
- (26) 『石湖居士詩集』卷二十七。
- (27) 同・卷三十。
- (28) 例えば「春晴出遊」(卷二十四)、「春社」四首其二(卷二十七)、同其四(同)、晚歩(卷三十五)など。他に「時平」「昇平」等の表現も少なからず見える。
- (29) 『呂氏春秋』卷十九、離俗覽、舉難。
- (30) 『陸游選集』朱東潤選注(上海古籍出版社) 一二頁。
- (31) 興元府を離れて以後を指す。序を参照。
- (32) 兩者の農村描寫に於ける相違點は、農民の喜怒哀樂の表現

- に端的にあらわれる。まず喜と樂について言えば、放翁の「豐歲」(卷三十七)と范成大「秋日田園雜興」第八首及び第十首(『石湖居士詩集』卷二十七)とを比較した場合、
- 農民の動作や表情を直截に描く放翁に對し、范成大は脱穀場や農具の音など、風景を中心に描寫する。
- 放翁は、豐年の酒盛りに加わり農民達と喜びを分とうとする自分自身の姿を詩に詠い込んでいるのに對し、范成大は同じ酒を酌むにしても、新酒のでき具合に思いを馳せるにとどまる。
- といった違いがある。范成大はどちらかといえば農民の生活を外側から眺める、理知的な筆使いを用いたと言えよう。農村の困窮についても、例えば放翁の「鄰曲有未飯被追入郭者憫然有作」(卷二十一)、范成大「後催租行」(『石湖居士詩集』卷五)に兩者の作風の違いは顯著である。放翁が些か野暮に思われる程、農民の苦しみを自分の苦しみとして感じようとすする謂わば絶叫型のスタイルをとるのに對し、范成大は淡々とした客觀描寫を用いるのみで決して個人的感情を交えることは無い。然し却つてその一種自然主義的とも言えるような手法が、深刻な効果を生んでいると思われる。
- (33) 『詩稿』卷八十五。
- (34) 「寓懷」卷二十二、「雨夜」卷三十三、「道室戲詠」卷七十四。
- (35) 『宋史』卷三百九十五、陸游傳。

③⑥ 『朱文公文集』卷六十四、書、「答鞏至」二十首其四（四部叢刊本）。

③⑦ 杜甫が、汝陽王李璣についてうたった部分。「汝陽三斗始

朝天、道逢麴車口流涎、恨不移封向酒泉」（杜甫「飲中八仙

歌」『錢注杜詩』卷一）。

③⑧ 『渭南文集』陸子適序「凡命及次第之旨、皆出遺意、今不

敢紊。」（四部叢刊本）。